

木下武男『格差社会に挑むユニオン』を読む

——野営地にて・あるいはレーニンがクラシックを聴かないこと。

基本的には読んだ本の感想やまとめを。でも気分屋なのでときおり

映画や日常のことも。

(2011年01月04日)



木下武男『格差社会に挑むユニオン——21世紀労働運動原論』(花伝社)を読んだ。すさまじい。約2年ぶりに読んだが、久しぶりに読み返し、その鬼気迫る記述に驚かされる。ここ

までラディカルな主張をしていたのか。

氏の主張は以下のようなものである。

第一に、日本が格差社会から階層社会へと「転換」したということ。ある意味で、00年代中葉以降の格差社会に対する社会的認識を批判するものがあり、その主張は鋭い。

もともと、大企業の労働者は日本型雇用が適用さ

(花伝社、2007年、2310円)

れ、定期一括採用、内部昇進性、企業内労働力移動、定年退職制と電産型賃金が適用されていた。しかし、グローバルゼーションによる「国民的競争国家」化（ヒルシユのまだ読んでないほう。読みたいが、少しばかり余裕がない。早く読みたい）によつて、労働規制は切り崩され、既存の労働市場は再編成の過程にある。（本書は07年出版。とはいつても、2010年度現在その過程はかなり本書通りに展開しているように思われる。）すなわち、高い技能を有する中核的正社員を一方に、他方では周辺の正社員と非正規社員（派遣、パート労働、請け負いなど）が大量に創出されることで、これまでの大企業労働者とそれ以外の労働者という労働者の「格差」から、「階層」社会へと転身したのである。

重要なのは、後から展開するが、後者のほうであつて、周辺の正社員と非正規社員は、もはや日本型雇用が適用されない。（もともととされていなかった人々もちろん一定層存在する。その層と、別の層が、ともに拡大傾向にあるとみてよいと思われる。）彼らは、公的社会保障がもともと企業依存で手薄なことも相まって、賃金のみでは生活していけない、生活自立型なのに自立していけない労働者層なのである。（なぜ生活自立型「非正規」と呼称してしまうのだろう。非正規社員も含む形で「周辺の社員」でいいんじゃないの。名前は付けるのが難しいけど、両者を分ける意味であるのか…）この層の出現が、決定的に重要なのである。理由はいかによる。

第二に、労働組織の形態論と労働者の類型論が、日本において齟齬をきたしているものであり、その変換が必要だということ。

労働者の類型は、上述のように新しい労働者層が出現しているということである。労働組織の形態論は、企業別組合が強いということである。両者の関係が齟齬をきたしていることが問題なのである。

欧米では、アメリカではすさまじい弾圧を受けていて現在ではかなり労働市場がヤバいらしいがそれはさておくとして、クラフトユニオンから一般労働組合へと19世紀に拡大していった。というのも、資本主義が拡大していくことで賃労働―資本の関係も数的にも質的にも拡大していったのだから、これまでのように職人の、親方だけが形成する労働組合だけでは資本の力を抑えられないとして、意図的に職業組合、産別組合、そして一般労働組合が形成されていったのである。おそらく重要なのはクラフトユニオンの外部からそのような運動が盛り上がったということであって、現在もヨーロッパでは産別労働組の力は強い。

しかし、日本ではそのようなことが起こらなかった。その論争に関してはクラフトユニオンがそもそもなかったということが言われているが、私にはよくわからないのでしておくとして。戦前・戦後間もなくの時期に激しい弾圧を受ける形で企業別に編成された労働組合は、下部細胞に強い権力、執行権、財政権、人事権があったことから、労働者階級としての連帯よりも、一企業の労働者として自己同一化を果たし、資本との闘争ではなく個別資本との「和解」

(階級和解は原理的にありえない。あえてこの表現を用いている)によって自社以外の資本との競争に打ち勝って、パイの分配にあずかったのである。これは戦後の間、批判にさらされ続けたが、経済成長が継続し、分配がうまくいったことによつて、共産党までもが「一企業一組合」を肯定することとなつてしまつた。

グローバリゼーションによる労働者の変容の下では、企業別組合が労働者の権利を守れないことが白日の下にさらされた。イデオロギーから少しでも自由になろうと意図すれば、けして難しい話ではない。変革は絶対的に必要なのである。

第三に、労働組合および労働者集団の政治的偏向への批判である。

しかし、変革が必要なのは形態だけでない。戦後しばらくの間、党が「大衆ひきまわし」をやつたことである。これは難しい問題であるが…。社会党や共産党が、自身の政治的躍進の下部組織として労働組合を見たために、選挙の際の動員や、党内のヘゲモニー争いのせいで組合が分裂するようないふことが多々あつたし、これに資本の側の圧力が加われればそりゃ負けるだろうてなもんである。(現在に至るまで党派ゴリゴリの「古い人々」はやたらと前衛ぶりが、そしてそういう人つて「いまだ革命ならず」てなもんで意外といふんだけど、個人的には早く死んでほしいな、と思う。)

重要なのは、まず労働組合の原点に立ち返ることである。労働者の労働条件、生活条件のた

めに機能する集団だということ。これが重要なのであって、この機能を十全に果たせれば労働組合の仕事は半分くらい完成したようなものである。（あとの半分はオルグおよび活動家集団だが、私はこれに関しては言えることなどない。）

とくに第Ⅲ部に、分からない部分もあるにせよ、すごい本だと思う。

この感想を前提としつつ、疑問を抱いたのは次の点である。過去の自分からすれば単なる日和見主義者だろうか（笑）

第一に、労働者の類型論から微妙にズレる人々の対処である。具体的には、40代前後、そしてそれ以降の中年層である。

企業別組合が問題を有しているのは分かった。（分かったというよりは、現在にいたってまだ企業別組合を称賛する輩はそれこそ「不貞の輩」だと思わなくもないが…。）しかし、すでに企業別組合に参加している、とくに中年層以降の労働者はどうすればよいのか。おそらく本質的にはなく戦略的な認識として、「若者」「女性」を新しい労働運動および労働組合の主体としているのだから（もちろんそれは、実際にユニオンを立ち上げたり裁判で戦っているからという実質的な根拠もあるだろうが）、実際に家族を養ったり介護で高齢者を雇わなければならぬのは若者よりは中年層ではないのか。そういった人々は、どのように運動に巻き込んでいけ

ばよいのだろうか。彼らの労働者類型や階層はどうなっているのだろうか、と少し考えた。

第二に、日本型雇用とヨーロッパ型労働市場の（こう表現してしまうと語弊があるが、しかし本文ではこう表現されていることが多いので）間に、ある種の妥協点は見いだせないのだろうか。

労働組合論が中心になるので、むしろ政策論として語ることは意図的に避けているのかもしれないが、日本型雇用を完全に否定するわけではあるまい。当然、企業外部の職業訓練、企業年金に依存しない安定した公的年金、子供手当、住宅手当、職業紹介などの公的部門による主導が必要な部分では改革は論をまたない。しかし、例えば工場労働者が技能を身につけるといふ点では、必ずしも年功賃金と職種別賃金が対抗しないのであって、年功賃金をフラットなものにしつつ職種賃金に置き換えるように規範化（政策と言いたいのだが、賃金体系や労働形態は法制度化というより企業や労働組合が決める規範的なものでこう表現した）していく手法はないのだろうか。

第三に、労働政治の部分が書かれてはいるが、やはり福祉国家論のことが気になる。端的に言えば、「隠している」感じがする。チラッと見せたが中身は見せない、という感じ。光源氏が竹垣の間から小さい女の子除いて興奮するみたいな（笑）

産別の運動が弱かったが、多くの社会運動が見られたことは意外と強調されていない、日本の良い点のほうである。（もちろんだからと言って産別の運動がいらないうのは全く筋違い。）有機農業や反原発運動、労働の在り方運動やセツルメント運動などなど。福祉国家が日本では「3周遅れ」の現状から行けば、産別の運動を形成しつつも、既存の運動、それが小さくてもいま果ててしまっても、それらとの並走を、つまり二正面作戦で、資本を追いつみつつ少しでも人間らしい社会を作っていけると思うが、まあ現在の私では知識がなさ過ぎて空想のお話だが。

本書は、あくまで論争の書なのだろう。私は違うが、社会党シンパだった人とか共産党大好きな人からすれば嫌悪の対象になることは想像に難くない。私としてはこのラディカルさを忘れず、しかしどこかヒヨって、なんとか「今あるもの」と「理想的なもの」の架橋を、両者が対立しない範囲で、実現していきたい。と言ったってためえにながでkindよという話だが。この本を読むと元気が出るが、それはあくまで主観的な問題なのである。よく言われるように、理論で世界は変えることが出来ず、「重要なのは世界を変革すること」なのだから。色々と考えさせる本でした…。

出所：<http://liberation.paslog.jp/article/1780704.html>

◇ Ctrl キーを押さえながら上のアドレスをクリックすると、サイトに行きます。